

デーリー東北 2021年(令和3年)9月2日(木曜日) (21)

私見 Thursday 創見

6月のことだが、八戸工業
大学と八戸アックセンターの
共同で、公開講座「種差海岸
の植生に明える「津波に負
けない強さのヒミツ」を開
催した。前半は講義で種差海

岸の植生の特徴や津波の影響
を解説、後半は観察会として、
参加者のみなさんと海岸にあ
るさまざまな環境(湿地、砂
地、岩場など)の違いと分布
する植物の違いを観察しなが

ら歩いた。参加者のみなさん
からのアンケートでは、「普
段は意識したことのなかった
種差海岸のすばらしさに気が
付いた」「種差の魅力を再確
認した」などのうれしい回答
をいただき、大学外での活動
の重要性を再認識した。
ところで、いまの種差海岸
の植物の多様性は、自然環境
だけではなく、人も維持に貢
献しているのをご存じなうら
か。日本では、湿潤で温暖な
気候から、国土のほとんどは
放置しておけば必ず森林にな
る。先日日本テレビ系の「ザ
!鉄腕!DASH!!」では、
福島県浪江町にあったDASH
H村の水田が、原発事故後10
年で低木林になっていったよ
うに、国内の高山、風衝地(風
が吹き付ける場所)、湿地、
海岸以外は放置すれば植生遷
移によって、森林に変化して
いく。

種差海岸の植生管理

人が維持する半自然草原

世界の陸地の約24%が草地
だが、日本では高山のお花畑
に代表される自然草原は約1
・1%、箱根の仙石原のよう
な二次草原(半自然草原)も
約3・6%と少ない。私たち
が目にする草原のほとんどは
人間の影響のもとで成り立

鮎川 恵理

八戸工業大
生命環境科学科准教授



あゆかわ・えり
1973年、東京生まれ。
総合研究大学院大博士課程修了。2004年から八戸工業大で勤務。植物生態学が専門で、コケ植物の生態や海岸植生が主なテーマ。青森県環境審議会～委員などを務める。00～01年の第42次南極観測隊に参加した。

いる。半自然草原だ。主に放牧、刈り取りや火入れなどの人間
の管理のもとで維持されてき
た植生なのである。全国的に
有名などころでいうと、箱根
の仙石原は火入れと採草、阿
蘇山は放牧、採草、火入れに
より、森林への遷移を止めて
いる。
全国で昭和30年代までは、
ひとひとの暮らしとともに、
家畜の飼料やカヤ葺き屋根の
材料などの需要があり、草原
が維持されてきた。しかし生
活の変化により草原維持の仕
組みがなくなった結果、この
100年間で日本の草地の90
%が消失し、草地という環境
にしか生育しない植物の多く
は希少種となってしまった。
環境省レッドデータブック
に記載された維管束植物の減
少要因として最も多いのは、
遷移進行とされる。遷移進行
を止めるには、刈り取りが有
効で、成長が早く競争に強い
種、高茎の草本を刈り取るこ
とで、競争に弱い種や背丈の

低い種も生存できるようにな
る。また、刈り取りという攪
乱に耐性をもつ種や、土壌の
栄養不足というストレスに強
い種も生存できるようになる
結果、さまざまな種が共存で
きるようになる。
さて、種差海岸では昭和30
年代までは、馬の放牧により
遷移の進行が止められてきた
が、その後は人の手で刈り取
りをするこにより、遷移を
食い止めている。刈り取りに
は、多くの地元市民団体、企
業などのボランティア、観光
協会、八戸市、環境省が連携
して関わっている。
希少な種の生存が今も可能
となる環境を維持するため
に、数十年にわたり、刈り取
りに関わっている方々がいる
からこそ、今の種差海岸があ
ることを多くの方にぜひ知っ
ていただきたい。種差海岸の
刈り取りは、国内でも貴重な
なっている半自然草原の
維持にも欠かせないもののな
だ。
3年前、植生学で著名な奥
田重俊横浜国立大学名誉教授
や、私の所属していた東京農
工大学農学部の植生管理学研
究室の先輩方など関東の約10
名の専門家と、一緒に種差海
岸各地をめぐる機会があつ
た。どなたも、種差海岸の海
岸、砂浜、風衝草原、後背湿
地、半自然草原などの環境の
多様性や希少種の豊富さに感
動していた。また、草刈りの方
法次第で、より多様性を増す
ための方法など、いくつかの
アイデアもいただいている。
これまで地域の方々が中心
となり維持してきた種差の半
自然草原を、少子高齢化の中、
次の世代に残していくために
も、新しい種差ファンも増や
しながら引き継いでいくこと
が必要だ。